ラプンツェル

グリム
中島孤島訳

むかしむかし夫婦者があって、永い間、小児が欲しい、欲しい、といい暮しておりましたが、やっとおかみさんの望みがかなって、神様が願いをきいてくださいました。この夫婦の家の後方には、小さな窓があって、その直ぐ向うに、美しい花や野菜を一面に作った、きれいな庭がみえるが、庭の周囲には高い塀が建廻されているばかりでなく、その持主は、恐ろしい力があって、世間から怖がられている一人の魔女でしたから、誰一人、中へはいろうという者はありませんでした。

或る日のこと、おかみさんがこの窓の所へ立って、

庭(にわ)を眺(なが)めて居(い)ると、ふと美(うつく)しいラプンツェル（（菜の一種、我邦の萵苣（チシャ）に当る。））の生(は)え揃(そろ)った苗床(なえどこ)が眼(め)につきました。おかみさんはあんな青々(あおあお)した、新(あたら)しい菜(な)を食(た)べたら、どんなに旨(うま)いだろうと思(おも)うと、もうそれが食(た)べたくって、食(た)べたくって、たまらない程(ほど)になりました。それからは、毎日毎日(まいにちまいにち)、菜(な)の事(こと)ばかり考(かんが)えていたが、いくら欲(ほ)しがっても、迚(とて)も食(た)べられないと思(おも)うと、それが元(もと)で、病気(びょうき)になって、日増(ひまし)に痩(や)せて、青(あお)くなって行(ゆ)きます。これを見(み)て、夫(おっと)はびっくりして、尋(たず)ねました。

「お前(まえ)は、まア、何(ど)うしたんだえ？」

「ああ！」とおかみさんが答えた。「家の後方の庭にラプンツェルが作ってあるのよ、あれを食べないと、あたし死んじまうわ！」

男はおかみさんを可愛がって居たので、心の中で、

「妻を死なせるくらいなら、まア、どうなってもいいや、その菜を取って来てやろうよ。」

と思い、夜にまぎれて、塀を乗り越えて、魔法つかいの庭へ入り、大急ぎで、菜を一つかみ抜いて来て、おかみさんに渡すと、おかみさんはそれでサラダをこしらえて、旨そうに食べました。けれどもそのサラダの味が、どうしても忘れられない程、旨かったので、

翌日になると、前よりも余計に食べたくなって、それを食べなくては、寝られないくらいでしたから、男は、もう一度、取りに行かなくてはならない事になりました。

そこで又、日が暮れてから、取りに行きましたが、塀をおりて見ると、魔法つかいの女が、直ぐ目の前に立って居たので、男はぎょっとして、その場へ立ちすくんでしまいました。すると魔女が、恐ろしい目つきで、睨みつけながら、こう言いました。

「何だって、お前は塀を乗越えて来て、盗賊のように、私のラプンツェルを取って行くのだ？　そんなこと

をすれば、善いことは無いぞ。」

「ああ！　どうぞ勘弁して下さい！」と男が答えた。

「好き好んで致した訳ではございません。全くせっぱつまって余儀なく致しましたのです。妻が窓から、あなた様のラプンツェルをのぞきまして、食べたい、食べたいと思いつめて、死ぬくらいになりましたのです。」

それを聞くと、魔女はいくらか機嫌をなおして、こう言いました。

「お前の言うのが本当なら、ここにあるラプンツェルを、お前のほしいだけ、持たしてあげるよ。だが、そ

れには、お前のおかみさんが産み落した小児を、わたしにくれる約束をしなくちゃいけない。小児は幸福になるよ。私が母親のように世話をしてやります。」

男は心配に気をとられて、言われる通りに約束してしまった。で、おかみさんがいよいよお産をすると、魔女が来て、その子に「ラプンツェル」という名をつけて、連れて行ってしまいました。

ラプンツェルは、世界に二人と無いくらいの美しい少女になりました。少女が十二歳になると、魔女は或る森の中にある塔の中へ、少女を閉籠めてしまった。その塔は、梯子も無ければ、出口も無く、ただ頂上に、

小さな窓が一つあるぎりでした。魔女が入ろうと思う時には、塔の下へ立って、大きな声でこう言うのです。

「ラプンツェルや！　ラプンツェルや！
お前の頭髪を下げておくれ！」

ラプンツェルは黄金を伸ばしたような、長い、美くしい、頭髪を持って居ました。魔女の声が聞こえると、少女は直ぐに自分の編んだ髪を解いて、窓の折釘へ巻きつけて、四十尺も下まで垂らします。すると魔女はこの髪へ捕まって登って来るのです。

二三年経って、或る時、この国の王子が、この森の中を、馬で通って、この塔の下まで来たことがありま

した。すると塔の中から、何とも言いようのない、美しい歌が聞こえて来たので、王子はじっと立停まって、聞いていました。それはラプンツェルが、退屈凌ぎに、かわいらしい声で歌っているのでした。王子は上へ昇って見たいと思って、塔の入口を捜したが、いくら捜しても、見つからないので、そのまま帰って行きました。けれどもその時聞いた歌が、心の底まで泌み込んで居たので、それからは、毎日、歌をききに、森へ出かけて行きました。

　或る日、王子は又森へ行って、木のうしろに立って居ると、魔女が来て、こう言いました。

「ラプンツェルや！　ラプンツェルや！
　お前の頭髪を下げておくれ！」

それを聞いて、ラプンツェルが編んだ頭髪を下へ垂らすと、魔女はそれに捕まって、登って行きました。

これを見た王子は、心の中で、「あれが梯子になって、人が登って行かれるなら、おれも一つ運試しをやって見よう」と思って、その翌日、日が暮れかかった頃に、塔の下へ行って

「ラプンツェルや！　ラプンツェルや！
　お前の頭髪を下げておくれ！」

というと、上から頭髪がさがって来たので、王子は登っ

て行きました。

ラプンツェルは、まだ一度も、男というものを見たことがなかったので、今王子が入って来たのを見ると、初めは大変に驚きました。けれども王子は優しく話しかけて、一度聞いた歌が、深く心に沁み込んで、顔を見るまでは、どうしても気が安まらなかったことを話したので、ラプンツェルもやっと安心しました。それから王子が妻になってくれないかと言い出すと、少女は王子の若くって、美しいのを見て、心の中で、

「あのゴテルのお婆さんよりは、この人の方がよっぽどあたしをかわいがってくれそうだ。」

と思いましたので、はい、といって、手を握らせました。少女はまた

「あたし、あなたとご一しょに行きたいんだが、わたしには、どうして降りたらいいか分らないの。あなたがお出［＃「お出」はママ］になるたんびに、絹紐を一本宛持って来て下さい、ね、あたしそれで梯子を編んで、それが出来上ったら、下へ降りますから、馬へ乗せて、連れてって頂戴。」

といいました。それから又、魔女の来るのは、大抵日中だから、二人はいつも、日が暮れてから、逢うことに約束を定めました。

ですから、魔女は少しも気がつかずに居ましたが、或る日、ラプンツェルは、うっかり魔女に向って、こう言いました。

「ねえ、ゴテルのお婆さん、何うしてあんたの方が、あの若様より、引上げるのに骨が折れるんでしょうね。若様は、ちょいとの間に、登っていらっしゃるのに！」

「まア、この罰当りが！」と魔女が急に高い声を立てた。「何だって？　私はお前を世間から引離して置いたつもりだったのに、お前は私を瞞したんだね！」

こう言って、魔女はラプンツェルの美しい髪を摑んで、左の手へぐるぐると巻きつけ、右の手に剪刀を執って、

ジョキリ、ジョキリ、と切（き）り取（と）って、その見事（みごと）な辮髪（べんぱつ）を、床（ゆか）の上（うえ）へ切落（きりおと）してしまいました。そうして置（お）いて、何（なん）の容赦（ようしゃ）もなく、この憐（あわ）れな少女（むすめ）を、砂漠（さばく）の真中（まんなか）へ連（つ）れて行（い）って、悲（かな）しみと嘆（なげ）きの底（そこ）へ沈（しず）めてしまいました。ラプンツェルを連（つ）れて行（い）った同（おな）じ日（ひ）の夕方（ゆうがた）、魔女（まじょ）はまた塔（とう）の上（うえ）へ引返（ひきかえ）して、切（き）り取（と）った少女（むすめ）の辮髪（べんぱつ）を、しっかりと窓（まど）の折釘（おれくぎ）へ結（ゆわ）えつけて置（お）き、王子（おうじ）が来（き）て、

「ラプンツェルや！　ラプンツェルや！
お前（まえ）の頭髪（かみ）を下（さ）げておくれ！」

と言（い）うと、それを下（した）へ垂（た）らしました。王子（おうじ）は登（のぼ）って来（き）たが、上（うえ）には可愛（かわい）いラプンツェルの代（かわ）りに、魔女（まじょ）が、

意地のわるい、恐らしい眼で、睨んで居ました。
「あッは！」と魔女は嘲笑った。「お前は可愛い人を連れに来たのだろうが、あの綺麗な鳥は、もう巣の中で、歌っては居ない。あれは猫が攫ってってしまったよ。今度は、お前の眼玉も掻挘るかもしれない。ラプンツェルはもうお前のものじゃア無い。お前はもう、二度と、彼女にあうことはあるまいよ。」
こう言われたので、王子は余りの悲しさに、逆上せて、前後の考えもなく、塔の上から飛びました。幸いにも、生命には、別状もなかったが、落ちた拍子に、茨へ引掛かって、眼を潰してしまいました。それから

は、見えない眼で、森の中を探り廻り、木の根や草の実を食べて、ただ失くした妻のことを考えて、泣いたり、嘆いたりするばかりでした。

王子はこういう憐れな有様で、数年の間、当もなく彷徨い歩いた後、とうとうラプンツェルが棄てられた沙漠までやって来ました。ラプンツェルは、その後、男と女の双生児を産んで、この沙漠の中に、悲しい日を送って居たのです。王子は、ここまで来ると、どこからか、聞いたことのある声が耳に入ったので、声のする方へ進んで行くと、ラプンツェルが直ぐに王子を認めて、いきなり頸へ抱着いて、泣きました。そし

てその涙が、王子の眼へ入ると、忽ち両方の眼が明いて、前の通り、よく見えるようになりました。

そこで王子は、ラプンツェルを連れて、国へ帰りましたが、国の人々は、大変な歓喜で、この二人を迎えました。その後二人は、永い間、睦じく、幸福に、暮しました。

それにしても、あの年寄った魔女は、どうなったでしょう？　それは誰も知った者はありません。

底本：「グリム童話集」冨山房
１９３８（昭和13）年12月12日発行
※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。
入力：大久保ゆう
校正：鈴木厚司
２００５年3月15日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。